

『保育の体験と思索』

津守 真 著

大日本図書

一九八〇年

の息使いが聞こえてきそうである。そして氏が何に心を砕いているかが伝わってくる。

氏は三つの保育の場を持っている。ひとつは幼稚園であり、ひとつは知恵遅れの子どもの達のグループであり、最後のひとつは現在青年期に至っている氏自身の家庭の子ども達である。このこと自体、驚異的なことであるが、さらにこの三つの場が互いに支え合って子ども達の姿をより確かなものとして浮び上らせている。目先の成果に走ることをいまいしめ、長い時間経過の中での幼児期の意味を問い返しつつすすめる省察の姿は、私達に人間の重みを伝えてあまりある。

さて、前置きはこれくらいにして、一、二節紹介してみることにしよう。

この書物の名は、本誌読者の方々には

もうすでに親しいものである。「子ども

の世界の探求」と副題をそえられたこの

連載は、四年間もの長い間、私達に様々

な子ども達の姿を開示し、そのたびに保

育に新たな光をなげかけてくれた。この

ような経過があるので、今ここであらた

めて紹介することは不必要なのかも知れ

ないけれど、私はあえて今一度、ぜひこ

れを一冊の書物として手にとっていただ

きたいと心から思う。

氏自身が、世に言う「保育理論」を前

面に出さない方だということもあり、一

冊の書物としてまとまりをもたせること

により、氏の保育思想の核心により深く

接することができるからである。また、

この書物は三十七の章にわかれている

が、折にふれてどの一節からでも読み返

すこともできる。さらに巻末の索引もま

たユニークである。ここからも子ども達

白紙のノート 十二月二十七日

Kは白い画用紙を三つに折り、はさみで切り、ホチキスでとめ、白いノートを作る。次々に数人の子どもが同じような白いノートを作る。

Kは白い画用紙をはさみで切ってホチキスでとめ、白いノートを作った。何冊も作ってそれを持ち歩いてきた。白い紙を切り何もかかないで綴じてノートを作るといふのは、このころの子どもの好んで作るもののひとつである。おとなは、もったいないから何かかいたらいいがちなのであるが、これは白紙のノートであることに意味があるのではないかと思う。

ちょうどこのころに、ある子どもたちは数枚にわたるつづきものの描画を描いたり、それにおはなしをつけたりする。

こういうことから考えると、何もかかない白紙を重ねてノートを作るとき、子どもの頭の中にはすでに、いろいろの構想

が形にならないままに渦を巻いてあるのではなからうか。白紙のノートは、つづきものをかきこんでいくことのできる、いろいろの可能性をもった空間である。

子どもの遊びの展開を見るときも、同様のことがある。遊びにおいて、次にどういう考えを出していくかは、子ども自身に委ねられている。どのような理由であれ、それがきめられていたら、遊びではなくなくなってしまふ。未来は子どもにとっては何もかかれていない白紙のようなものである。現在において、そのような未来をもつことができるとき、子ども自身の内側からイメージが湧き起こってくるであろう。それが次の瞬間の遊びを作る。

白紙のノートを作って持ち歩いている子どもの姿を見ると、さまざまな可能性をもつ未来が察せられて、何か豊かな気持ちになる。そこにはいつか、思いもか

けない物語りが描かれていくであろう。それはときがきて、子ども自身が作り出していくものである。

次に、「入園を前に心躍らせて待つ」という題をつけられた第九章に少しふれてみたい。この書物全体の中で、「家庭での子ども達」は、資料が具体的に示されるだけに、私達に直接ひびくものが多い。

Kは入園前の一、二カ月、幼稚園という新しい生活を前に期待に胸をふくらませて時をすごす。一番お気に入りの帽子をかぶった女の子の絵、何人も手をつないだ子どもの絵、「さくらんぼをとっている子」と名付けられた自分自身を描いたはなやかな絵、そして入園式前夜のうれしいなー、うれしいなー、あしたはMちゃんと幼稚園にいくんた。お友達が十人も百人もできた」ということば。

だが、入園式の日には口もきかず家に帰り、翌日はたった一時間半ほどの「幼稚園」のあと、「もう夕方？」と聞く。そしてこのあとこの子どもは内部にひきこもり、再び外に関心をむけるまでに一年以上を要したという。

前段のこの子どものはれやかな姿を見て、「幼稚園入園」ということがこんなにも子どもの生活を明るくするということ、そしてその後にくしく失意の日々に、私達は痛みを感じないではいられない。保育という営みのきびしきりにつ然とするのは私だけではないと思う。

この書物の最大の魅力は、著者によって開示される生きた子ども達の姿であろう。それは子どもという存在自体のもつ生命性なのかも知れない。しかし、私達は氏という案内人を得てはじめて知りうるものでもある。おそらく、氏自身は「案内」などしているつもりはないであ

ろう。氏は「子どもの世界」という未知の空間に、一人の大人として身を置いていただけなのかも知れない。子ども達の前に一人の人間であるうとする氏の真摯な姿が、逆に私達を子どもの内面の世界にまでひきこませてしまうのであるう。

それは自分自身の全存在をかけて対象を理解しようとする仕方であり、これがそのまま、子どもにとって大人とは何か、大人にとって子どもとは何か、そして人間にとって子どもとは何かという基本テーマにつながっていくのである。この本を読みながら、自分自身がよみがえるような体験をする方が多いと思う。それはこのような氏のあり方がそうさせるのだと思う。

最後に氏の保育思想に少しふれてみたい。氏のことばを借りるならば次のようになる。

「幼児が自分自身を打ちこんで、ひた

むきに遊ぶ姿を生み出すところに、保育のはたらかがある。ひたむきに遊ぶ幼児の姿には人を魅きつける力がある。

このような遊びの具体的内容は、多くの場合、あたりまえのごたごたした行動にすぎないので、幼児教育という正規のルートを考えるときには、その価値を認められないことが多い。しかし、遊びの中で養われている諸能力には、他のいかなる方法による教育的活動におけるよりも、大きなものがある。また、その中で、人間の生涯を通してつづく人生の基本的経験が養われている。しかし、それらの効能よりも、幼児が楽しく遊ぶこと自体が価値があり、そのような幼児をつねに傍にもっていることは、おとなにとつての喜びである。

むかしから、子どもは遊ぶことよって人間となってきた。現代においても、遊ぶ姿を実現することは保育の中心課題

である。」

私達は氏によって示された子ども達の発達の様を通して、「遊ぶこと」が彼らにとって生きることでそのものであることを知った。しかし、「幼児が自分自身を打ちこんで、ひたむきに遊ぶ姿」を実現させることに心を砕いている保育の場合は、残念ながらそう多くはない。現在、子ども達にかかわる多くの大人は「子どもの発達の姿」を追い求め、それぞれに献身的な努力をしているのだと思う。そんな中であって、ただ「ひたむきに遊ぶ姿」を実現させるといふことは、最もまわりくどいことのように映るのかも知れない。しかし、それが最も子ども自身を生かす、そばにいる大人達をも生かす道であることが、大人達によって納得されていないのであろう。そうであるとすれば、子ども達の遊ぶ姿を通して、彼らと

それに関わる大人達の発達の姿を浮き彫りにしていくという保育学の中心課題はまだまだ追求され続けられねばならない。

ご存知のように氏には、「乳幼児精神発達診断法」という有名な著書がある。二十年も前に乳幼児の行動の詳細な観察記録を基礎資料として作成されたものであるが、現在もあちこちで使用されている。しかし、氏自身も語っているように、それとこの書物との間には、子どもの見方に関する視点の百八十度の転回がある。「子どもの行動を科学的、客観的に見ることに固執していたのでは、精神をもった人間の理解には至らない。行動は子どもの世界の表現であり、またおとな自身の動きの中でとらえられる現象である。保育者の目はこれである。」と断言し、「今回のこの書物の基礎資料はい

ずれも、私自身が、保育者として、子どもといっしょに、遊んだり、生活したりした体験の記録である。こういう方法をとらなければ、もう一步、子どもの世界の真実に近づくことができなかった私自身の児童研究者としての過程でもある。」と結んでいる。

私達は、この書物の成果だけをとり入れることに腐心してはなるまい。それぞれが、それぞれの方法で子ども達の行動をとらえ、その意味を読みとく作業を重ね、子どもへ至る道、子どもと通い合う道を少しでも広く豊かなものにしていかねばならぬと思うのは私だけではないだろう。

(山口大学 友定啓子)